

アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会
第5号 2007年3月 61～70頁

ハンス・キュングにおける仏教の理解（1）

アンナ・ルッジェリ

1. はじめに

カトリックの神学者であるハンス・キュング（Hans Küng、1928年生まれ、テュービンゲン大学名誉教授）はスイス生まれ、1960年から1996年まで神学（エキュメニカル神学 Ecumenical Theology）を講じ、1960年から1996年までエキュメニカル研究所（Institute for Ecumenical Research, University of Tübingen）所長として活動し、現在は地球倫理財団（Global Ethic Foundation）の団長（president）を務めながら、宗教に限らず、政治、経済、文化の諸分野で地球規模の普遍的な平和を目指して活躍している。

キュングは、40年に渉る活動において「多数の著作を著し、新旧キリスト教間の統一に貢献する一方、キリスト教の無謬性を批判するなど、キリスト教の改革にもあたり、さらに広く諸宗教間の融和、地球倫理の推進などに尽力し」⁽¹⁾ てきた人物である。彼の独自性は、以上のことに加え、宗教を現実の社会とリンクし、各宗教の歴史のパラダイム転換を見通し、それに対して深い洞察をする一方で、大胆な批判を加え、具体的な提言を挙げたことにある。そして、地球倫理という緊要な問題の解決を意図し、学問的でありながら、一般の人にも理解しやすい表現で最新の情報を発信し、魅力ある比較研究を遂げたことが特徴として挙げられる。これらの点から、過去に類をみない学者であることが理解できよう。

また、キュングは世界の平和のために全力を尽くしつつけた。国際連合のアナン事務総長によって集められた「世界の賢人メンバー」（20人）の中の一人でもある。また世界を回りつづけ、あらゆる宗教家や政治家や様々な学者に出会い、議論をしながら、地球倫理に対する認識を高めようとしている。2005年5月に来日して、第22回庭野平和賞を受賞し、京都で（5月13日）講

(1) ハンス・キュング『世界諸宗教の道—平和をもとめて—』（訳者あとがき）、278頁。以上の紹介はキュングの著作を日本語に訳した吉田収（1938-、東洋大学短期大学教授）の紹介を参考にしたものである。吉田収は、ハンス・キュングの著書の中、次の4冊を訳したものである。
ハンス・キュング『世界諸宗教の道—平和をもとめて—』、世界聖典刊行協会、吉田収、久保田浩訳、2001年；
ハンス・キュング、カール・ヨーゼフ・クシュル（編著）『地球倫理宣言』、世界聖典刊行協会、1995年；
ハンス・キュング（編集）『今こそ地球倫理を』、世界聖典刊行協会、1997年；吉田収『地球倫理—人類の未来のために—』、世界聖典刊行協会、2000年（第2刷刊行）。吉田収は「キュング」を使うが、小論では発音的に正しいと思われるので、「キュング」を利用している。

ハンス・キュングの著作の中で日本語に翻訳された他のものは、次のようである。ハンス・キュング、ジュリア・チン（共著）『中国宗教とキリスト教の対話』（訳者代表：森田安一、藤井潤、大川祐子、楊曉捷）、刀水書房、2005年。

演もした。そのとき、彼はパラダイムの分析、地球倫理と宗教間対話の相互的な関係を強調し、平和的な世界の実現への希望と期待を強く表した。そのためには古い時代のパラダイムや対立のパラダイムへの逆戻りはしないことが条件であり、またそれには他の宗教や文化との対話を進めることが不可欠であると述べた。⁽²⁾

ハンス・キュングの活動や研究は多面的なものであるが、小論では、神学者でありながら宗教間対話のために彼が行った仏教との対話、並びに彼自身の仏教の理解および仏陀とイエス・キリストの比較という共同的な試みを紹介したい。

2. キュングによる仏教とキリスト教の対話の方法論

キュングの、パラダイムの分析⁽³⁾に基づく宗教間対話によって、地球上のあらゆる宗教は、その教義や内容が異なっているにもかかわらず、根本的な本質や方法において近似しているということが理解できる。例えば、あらゆる宗教は似た問いに答えることを目的としていると思われる。つまり、世界とその起源はどこに求めるべきであるか、なぜ私達は生まれ、そして死んで行くのか、人間はどのような人生を送るべきであるか、というような本質的な問いである。そして、各宗教はそれぞれ独自の衆生救済とその方法を示している。

しかし、これに対してキュングは、キリスト教の信仰者としての道が自らの依って立つ真理の道であると信じるにもかかわらず、決して他の宗教を真の宗教でないと否定することはない。他の宗教もまた異なった形態を持つてはいるが、キリスト教と同様に真理に導くものであることは言うまでもない。この点をキュングは強調する。とくに、このグローバルなポストモダンのパラダイムにおいては、「唯一の真理」や「絶対的な宗教」として、キリスト教以外に救済の道は無い、というキリスト教の独善性を厳しく否定するのである。むしろキリスト教の信仰者たちは、自己の信仰に対してより一層深い反省の態度を示さねばならないとする。そして、こう言った意味において、キリスト教やイスラミ的な絶対主義 (absolutism) を拒絶する一方、安直にどの宗教にも真理があるとする他の宗教に対しても、表面的で無責任な寛容の態度を批判するのである。⁽⁴⁾

キュングは、あらゆる宗教間の対話の根本になるパラダイムの分析の重要性を示すために、まず自らが世界の宗教の分析と対話を試みたと思われる。この研究の成果は、他の宗教の専門的な学者との共同作業による、『キリスト教と世界の諸宗教-対話への道 (Christianity & World Religions: Paths of Dialogue)』⁽⁵⁾ として著された。この著作は、他の宗教の学者が説明した上で、

(2) 彼の演説は英語で行われたが、当時日本語の翻訳を含むパンフレットが配布された。さらに庭野平和財団によって記録集が出版された。

「庭野平和財団シンポジウム 2005『京都発：宗教者の新たなチャレンジ』～諸宗教間対話と平和～」(庭野平和財団、2005年)、を参照。

(3) これについて、アンナ・ルッジェリ「宗教における「パラダイム転換」ーハンス・キュングを通してー」『人間文化科学研究集録 第12号』、また「キリスト教と禅における歴史観の比較ーハンス・キュングのパラダイム適用を中心としてー」『アジア・キリスト教・多元性 第4号』(現代キリスト教思想研究会、2006)を参照。

(4) H. KÜNG, *Theology for the Third Millennium*, New York, Anchor Book, 1988, p. 250.

キュングがキリスト教側の答えを出す、という構造で考えられている。当然のことながら、その中にキュングの仏教者との対話も含まれている。キュングは、「私達が必要としているのは、各宗教の最も深い概念と意義を知るという成果を得るための対話である。さらにこの対話は、相互的に「与える」と「受ける」ことを含む批評方法に基づくべきものである。その原点は、互いの責任に基づいたものでありながら、誰も完全な「真理」を支配していないという意識である」、と強調する。⁽⁶⁾

この問題点を意識し続けた神学者としてキュングは、自分の答えにおいて次の二点を目標としている。

1. 他の宗教を前に、キリスト教自らも批評すること
2. すべての面ではなく、ただ互いの類似点を比較しながら、自分の宗教のメッセージに基づいた他の宗教に対する批評をすること⁽⁷⁾

決して容易ではないこの対話によって、各宗教のあらゆる面を正当化するのではなく、これらの最も良くても深い部分を語る必要がある、と述べる。さらにキュングは、仏教のパラダイムについて分析するために、キリスト教の神学の立場から次の点を重要視する。

1. 仏教の原点である歴史上の釈迦牟尼仏陀に戻って、この原点に基づく新しい仏教の形を批判的に考えること。
2. 全ての主な仏教宗派を排除しないパラダイムの理論によって、各宗の本質と論理と、仏教における存在の権利を肯定する。
3. 異なったパラダイム、或いは仏教宗派の形態を互いに対置させること。
4. 禅宗や浄土真宗のような、全ての主な仏教宗派との対話を行い、同時に様々なキリスト教のパラダイムとの比較を提示すること。⁽⁸⁾

またキュングは、前号⁽⁹⁾に述べたように新たな宗教間対話の試みとして、仏教における「パラダイム転換」の適用を行い、仏教を次の六つのパラダイムに分類した。⁽¹⁰⁾

(5) H. KÜNG, Christianity & World Religions: Paths of Dialogue, New York, Orbis Books, 1999 (first printing 1986). 伊訳は、H. KÜNG, Cristianesimo e Religioni Universali: Introduzione al Dialogo con Islamismo, Induismo e Buddhismo, Milano, Arnoldo Mondadori Editore, 1986. 原本はドイツ語で書かれている (Christentum und Weltreligionen)。小論では引用にあたって、伊訳版を使用している。

(6) H. KÜNG, Cristianesimo e Religioni Universali, pp. 8-9.

(7) 同上書、8 頁。

(8) 同上書、487-488 頁。

(9) アンナ・ルッジェリ「キリスト教と禅における歴史観の比較—ハンス・キュングのパラダイム適用を中心として—」「キリスト教と禅における歴史観の比較—ハンス・キュングのパラダイム適用を中心として—」『アジア・キリスト教・多元性 第4号』（現代キリスト教思想研究会、2006）15-23 頁。

1. 釈迦牟尼仏陀とその僧の原始のパラダイム
2. 上座部 (Theravada)、あるいは小乗仏教 (Hinayana) のパラダイム
3. 大乘仏教 (Mahayana) のパラダイム。これはまた、実践によって自己改革を端的に目指す禪宗と、信仰による浄土宗と、より行動的な日蓮宗というパラダイムにも導く。
4. タントラの金剛 (Vajrayana) のパラダイム
5. 資本主義と社会主義の間の対立によってもたらされた被迫害者 (中国、チベット、北朝鮮) としての保守的な仏教のパラダイム
6. おそらく、欧米の現代的な思想に対立する仏教のポストモダンのパラダイム⁽¹¹⁾

仏教のパラダイム転換も、キリスト教と同数であることに関しては、キュングはただの偶然の一致であると述べる。彼によれば、これらは仏教的に「法輪の転換」と呼ばれている。そして、彼は各パラダイム転換を詳しく分析するのである。とくに第2の上座部 (Theravada) の仏教の正統としての出家主義 (orthodoxy) のパラダイムと、第3の大乘仏教 (Mahayana) の民衆および在家主義のパラダイムへの転換を、キリスト教の第2である初期の教会のヘレニズムのパラダイムから、第3の中世ローマのカトリック教のパラダイムへの転換と比較することによって、その相似点を示すのである。⁽¹²⁾

さらに第3の大乘仏教のパラダイムにおいて、新たな異なったパラダイムとして、中国と日本の禪宗と浄土宗に注目する。その中で、禪は実践による改革のパラダイム (reformative paradigm) と、キュングによって呼ばれる。なぜならば、そのような実践的な自己改革ということは、煩瑣な仏教哲学とは乖離した、より単純なものであるので、本来の仏教の姿に戻ろうとする傾向が見られ

(10) キュングによれば、キリスト教の場合にも6つのパラダイムがあるが、それは単なる偶発的な符合である。この6つのパラダイムは、次のようなものである。

1. 初期のキリスト教徒の終末論のパラダイム (第1-2世紀)
2. 初期の教会のヘレニズムのパラダイム (第2-11世紀)
3. 中世ローマのカトリック教のパラダイム (第11-16世紀)
4. 宗教改革のプロテスタントのパラダイム (第16-17世紀)
5. 近代の啓蒙運動のパラダイム (第18-20世紀)
6. 現代の地球的パラダイム - ポストモダン? - (第20-?世紀)

さらに、別の図において、各パラダイムに各々の重要な構造上のエレメントが示されている。すなわち、

1. 第1のパラダイム=使徒-初期の集団-新約聖書-終末論
2. 第2のパラダイム=教会会議-皇帝-教会の教父-伝統
3. 第3のパラダイム=教皇-皇帝-教会法-スコラ哲学
4. 第4のパラダイム=聖書-支配者と長老会-懺悔-プロテスタントの正統主義
5. 第5のパラダイム=理性-民主主義の国家-技術的な発展-科学-歴史的批評的神学
6. 第6のパラダイム=新しい世界-連合の国家-平和運動-女性運動-環境運動-全体論的思想-教会の統一諸宗教中の平和-人類の倫理

(11) W. LAI, M.V. BRÜCK, H. KÜNG (foreword), Christianity and Buddhism: A Multi-cultural History of Their Dialogue, New York, Orbis Books, 2001, p. xi.

(12) 同上書、xi-xiii 頁。

るからである。彼がなぜこのように名付けたのかと言えば、他の仏教の諸宗派のように仏陀に対して尊敬を払うことに止まらず、禪宗においては、仏教の起源としての仏陀を指導者として新しく復活させ、さらに実践的な体験に導く本来の単純な教義に立ち帰ろうとするからである。しかし当然のことながら、キリスト教と禪宗との相違から、プロテスタントの改革のような「起源に立ち帰る」という神聖な目的とは異なり、禪宗の場合、「即今」において自分の仏心を自覚することが重要である。

キュングは、仏教との対話の方法論として仏教のパラダイム転換を検討するにあたって、様々な比較を試みた。その中で、強調されるのは歴史上の釈迦牟尼仏陀と歴史上のキリストとの比較、そして仏教の真理の根本的な部分と神学の根本概念の比較である。同じ順番でキュングの試みを紹介したい。

3. キュングにおけるイエス・キリストと仏陀の比較

3.1 前提的な考察

前述したようにキュングにとって、仏教の原点である歴史上の釈迦牟尼仏陀に戻って、この原点に基づく新しい仏教の形を批判的に考えることが非常に重要だと述べる。実際に彼自身は、キリスト教の場合には同様に、歴史的な人物であるイエス・キリストという原点に戻ることから自分のキリスト論的な神学を語る。

出発点としてキュングは次のような問いを表す。仏教徒にとって仏陀とは誰であるか。そしてキリスト教徒にとっては誰であるか。おそらく、仏陀をキリストの先駆者として、あるいはキリストを仏陀のように悟りを会得した者として見る人がある。当然のことながら、立場によって見方は変わるとする。⁽¹³⁾

ゴータマ・ブッダは、ナザレのイエスと同じように自分を「神」と呼んだことはなかったが、結局二人とも後の仏教論とキリスト論によって神化される。確かに仏教の場合は、「法」(Dharma)が普遍的な真理であり、すべての人間にとって妥当である。したがってこの真理は仏陀という人より大事であると言える。しかし、以上を考察した上でキュングは、「教義」(doctrine)と「人」(person)の区別は、実は抽象的であり、仏教の普遍的な真理は歴史上にのみ存在していると強く述べる。⁽¹⁴⁾

歴史的な面から見れば、この真理は仏陀に発見されて経験され、そして仏陀によって言葉や、同様に重要とされている沈黙、微笑み、行為によって説かれた。しかしゴータマ・ブッダの意義を拡大することは、宗教の真理とその歴史的な原点にのみ固定されるということではない。なぜならば、ある教義の真実性が、必ず自分の創造者の歴史性に縛られているわけではないからである。歴史上非現実的(historically unreal)なことが教義的に本当(doctrinally true)である場合もある。例えば、ヨハネの福音書によるキリストの教え、または大乘仏教の経典による仏陀の説法は、それぞれが歴史的なイエスと歴史的なゴータマ・ブッダに直接的に起源を明らかにすることができ

(13) H. KÜNG, *Cristianesimo e Religioni Universali*, p. 370.

(14) 同上書、371 頁。

なくとも、深いキリスト教的そして仏教的な真理を含んでいる。⁽¹⁵⁾

しかしキリスト教だけではなく、仏教のすべての宗派（禅宗でさえ）においても現代まで開祖との継続性は非常に重要である。そのため、すべての宗派はある程度仏陀との関連を証明しようとするのである。キリスト教におけるイエス・キリストの神学的な位置と仏教における仏陀の位置は異なるということを誰も否定できないとキュングは述べるが、最終的にいくら仏教の教義と仏陀の間に距離があるとしても、それは仏陀の教えである、と強調する。なぜならば、「目覚めた」者として仏陀が教義の信憑性と真正性を保証するからである。これを明らかにするものとして、「三帰戒」⁽¹⁶⁾すなわち「三宝」である「仏」・「法」・「僧」に帰依することを心に誓う言葉に（「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」）、まず「南無帰依仏」という表現がある。つまり仏教では、「法」と「僧」の前に「仏」を先に唱えている。キュングは、このことが大きな意味を表し、仏陀の重要性を証明する点である、として何回も説明の中で述べる。⁽¹⁷⁾

そして、このような意味において次々に原始仏教の経典や歴史的な仏陀に戻るような改革的な運動を始めた改革者が少なくないのである。キュングは最後に、他の宗教と同じように、救済の道は多数ではなく、仏陀にとっても「一つのみである」⁽¹⁸⁾と示す。

上記のように考察した上で、次にキュングはキリスト教について比較的に分析しはじめる。仏陀が自分を見るのではなく、自ら自覚する、すなわち仏陀になることを弟子に求めたと同じようにキリストも自分に向かうことより活動的な愛に集中するように弟子に求めている。パウロによると、キリストは信者の中に形にならないが、結果的にそれは信者が存在し続けることではなく、信者の中にキリストが存在することである。仏教の教義はいかだのようにそれ自体が目的ではなく、反対の岸に着いてから捨てられるようなものであると同様に、イエス・キリストの福音書も完全に神の国に集中しているメッセージである、とキュングは説明する。さらに、仏教においては仏陀の教えについて多くの論争や解釈があったにもかかわらず仏陀の公認が続けられたのと同じように、キリスト教においても福音書の解釈についての論争や引き裂き、多くの公会議とその違いと矛盾があったにもかかわらず、唯一の「主」であるイエス・キリストの信仰とその容認は続けられた。⁽¹⁹⁾

このような類似点を述べてから、キュングは次のような問いを通して仏教における「基準」的な問題を提起する。仏教の教義として呈されているすべては間違いなく仏教的であるか。同じように、キリスト教の教義として呈されているすべては間違いなくキリスト教的であるか。本当の

(15) 同上書、372 頁。

(16) 「三帰」とは、仏・法・僧の三宝に帰依することである。帰依は帰投し帰伏する意で、仏に帰依し（帰依仏）、教法に帰依し（帰依法）、僧に帰依し（帰依僧）のことである。「三帰戒」とは、三帰依の戒律を表す。「三帰依戒」とも言う。仏弟子となるには必ずそれを師から受け、その後に諸戒を受ける。（『禅学大辞典』、大修館書店、390 頁。）仏教の様々な宗派の勤行聖典に含まれている経であり、仏教に対する根本的な信仰を表す。

(17) 同上書、372 頁。

(18) 同上書、373 頁。

(19) 同上書、373-374 頁。

「仏教的」とは何か。また本当の「キリスト教的」とは何か。それは理論観念的な方法でも、経験的実験的な方法でもなく、ただ原始の書物や根本の教え、開祖自身の歴史的な関連のコンテキストのみに決められる、とキューングは示す。この視点からのみ非常に異なった仏教の宗派を結合させることが可能であり、そして他のヒンドゥー教、イスラム、キリスト教の宗派と区別されるエレメントを具体的に明示することができる。これは「教義的な原理」や「抽象的な芯」ではなく、解釈された経験と異なった表現における「共通の基礎」である。このような「共通の基礎」が、歴史的な仏陀の教えとこれを客観的で最もありそうな形で表現している經典である、とキューングは説明する。⁽²⁰⁾ この説明によって、キューングによる歴史的な仏陀に戻る必要性が明らかになった。

3.2 仏陀とキリストの比較の可能性について

キューングによると、イエス・キリストと同じように、歴史的な仏陀の研究は大きな問題にぶつかる。キリストの場合には、20世紀の前半までは多くの神学者（K. バルト 1886-1968、R. ブルトマン 1884-1976、P. ティリッヒ 1886-1965 等）が歴史的な面において、確実なイエス・キリストのイメージについて懐疑を表していたが、今日は史料と出典によるイエス・キリストの伝記は不可能であると広く思われているにもかかわらず、全体的に彼の伝道の独特な特徴や彼の行動と運命は間違いなく可能であるとされている。⁽²¹⁾

仏陀の伝記に関しては、彼の生涯を正確に語ることは非常に困難であり、少なくともイエス・キリストの場合より極めて難しいことをキューングは認める。イエスの場合には最初の書物が死から20年後ぐらい現れたのと異なり、仏陀の場合には200年後のことである。確かに口碑が普通であった古代インドでは時間的な距離はそれほど問題ではなかったが、新約聖書と異なり仏教の經典が拡大したことによって仏陀について歴史的な知識を得ることはより困難になった。したがって、新約聖書と同様に仏教の「歴史的な調査」のためには、大乘仏教の經典ではなく、できるだけ初期の資料や原始仏教の經典を検討すべきだと、キューングは強調する。彼は、仏陀の根本的な態度とメッセージや説法の主なラインなど、つまり全体的なイメージを取り出す必要がある、とするのである。⁽²²⁾

さらに、キューングが注意するのは、歴史の中で伝説や神話のようになる傾向があることである。仏陀の場合もイエス・キリストの場合も、二人の生涯に関しては奇跡的な出来事が多く語られる。しかし、現代的な意味における自然現象の「超自然」的な「奇跡」は、仏陀の場合においてもイエスの場合においても、それを証明するものが存在するわけではない。このような異常現象はすべての偉大な宗教家について回るが、これらが担うところはそれぞれの人物に形而上学的な権威・「神」的な適格を提供することにある。例えば、イエスの生涯で今までしばしば本質的なイベントと見なされた奇跡の話も、現在の認識からすると、決してこれらはイエスの特徴的な個性を決

(20) 同上書、374 頁。

(21) 同上書、375 頁。

(22) 同上書、376-377 頁。

定してはいない。この点において仏陀も例外ではないし、実際に誕生や死などにおける出来事では、仏陀とキリストの場合に多くの類似が見られる（異常な誕生、死の際の地震の発生など）とキュングは述べる。⁽²³⁾

それでは上記の点において多くの類似が見られるとすれば、イエスが他の偉大な宗教家、特に仏陀に対してはどのような相違を現しているのか。それとも類似の方を重視すべきなのか。このような問いに答えるのは、キュングの次の話題である。しかし、この問題と取り組むには、仏陀とイエスの間に驚くべき外面的と内面的な類似が見られるにも関わらず、そのような詳細な点を列挙するより、根底の構造を比較することに集中したい、とキュングは明示する。⁽²⁴⁾

次の問題に入る前に上記したキュングの立場についていまい少し考察したい。

上記の説明から明らかになったのは、宗教の様々な創始者の歴史的な原点に戻る必要性がキュングによって非常に強調されている、ということである。確かにどの宗教においても創始者は模範として重要な役割を果たすと思われる。しかし、それ以外に仏教の場合には、本来どこまで仏陀の実際の生涯とその歴史的な特徴が重要であるのか、ということについて明確に考える必要がある。当然のことながら、仏教のそれぞれの宗派が、仏陀すなわち「仏様」の重要性を強調するが、これは優位性を表すものより偉大な「尊敬」につながるアプローチなのではないかと思われる。非存在を含めてあらゆる存在を規制する原理を明らかにした者、そして自分の経験を通して衆生の救済の道を示した者として見られ、このような意味において最大の感謝の対象になるのである。また宗派によってこの重要性の程度が異なると思われる。例えば、禅宗では、仏陀との直接的なつながりは優先的な条件であるとされ、師から弟子への法のつながり、そしてその系統を伝える「法脈」というものは、釈迦牟尼仏あるいはその前に現れた仏からはじまり、毎朝の「朝課」（朝の勤行）に経として読まれる。一方では釈迦牟尼仏から自分の師匠まで法の血脈を読む禅僧侶がいるが、他方では大乘仏教から生じた宗派としての禅宗の歴史的な起源は中国にあるとされる。このような矛盾の原因は仏陀との継続の正当性とその権威にあると考えられる。それよりも仏陀の体験とその普遍性を自分の人生と自分の身で再現することが禅宗の思想と修行の中心である。それによって、歴史的な仏陀とその特徴の優先性と重要性がある程度制限されると言える。また、浄土系の宗派では、阿弥陀仏の救済をもたらす力を第一とする信仰の形が見られるが、このような宗派による仏は決して歴史上のゴータマ・ブッダと一致しないといえるであろう。

この点においては、キュングも自分の神学的な立場から簡単に離れることができないと思われることから、ある意味では彼にも理解できうことであると思われる。彼自身が説明したように宗教間対話においては、自分の立場、すなわち自分の宗教とその教義を捨てることなく、それよりも自分の立場上でできるだけ客観的に他の宗教を問い詰める作業であるとされる。キュングによる歴史的な研究のこだわりは、イエス・キリストの生涯とその詳細に対するキリスト教的な愛着が認識できる。⁽²⁵⁾

(23) 同上書、378 頁。

(24) 同上書、379 頁。

キューングに関して非常に評価すべきなのは、歴史的な根源の強調よりもパラダイムとパラダイム転換の分析を重視したところであると思われる。これによって明らかになる宗教の変化とその特徴と理由、特に宗教の国から国への展開が重要になり、それこそ中心的に理解されるべきものではないかと思われるのである。しかし、仏教の分析にあたっては、根本的な課題である「自己究明」について忘れてはいけないということを強調すべきだと思われる。

(Anna Ruggeri 京都外国語大学専任講師)

(25) 特に現在においてこの傾向が強く感じられる。例として、イタリアで2006年9月に出版され、すぐにベストセラーになった書物が挙げられる。この本（『イエスに対する調査－世界を変えた人が誰であったか－』）ではイタリアの有名な聖書学者であるマウロ・ペシェーがコッラード・アウジウスと対話しながら、あらゆる面において歴史上のユダヤ人であったイエス・キリストの生涯と思想を分析する著作である。イタリアで高い評価と人気も得た作品であるが、カトリック教会とバチカンの代表者から厳しい批判も受けた。しかし、ベストセラーになったその成功の理由の一つとして考えられるのは、歴史上のイエス・キリストと彼の生涯に対する西洋における極めて強い関心の存在が考えられる。

C. AUGIAS, M. PESCE, *Inchiesta su Gesù – Chi era l'uomo che ha cambiato il mondo*, Milano, Arnoldo Mondadori Editore, 2006.

アジア・キリスト教・多元性